発表 ④

自然農を軸とした自給自足の暮らし

－自然農で不安を安心に、不満を感謝に生きる－

自然農に出会うまで

福﨑貴之
自然農歴 11 年
営農歴　　7 年
鹿児島市 在住

1994 年、父の介護を機に、現在の生家に帰郷し慣行農業 6 年間、2001 年から有機農業 7 年間、小規模の営農を続けていました。農業をする傍ら食材については深い関心がありながら、農協向けのニガウリの生産や季節商品「七草粥の野菜パック」の生産農家でした。そのものの本質的な品質よりも、その外観の均一性や見た目を重視する体質に疑問を持ちながらも地域の物産館にも出荷していました。小規模の営農でも、トラクター、田植え機、コンバイン、籾の乾燥機などの導入が必要で、その燃料の購入、肥料の投入とその施肥管理、また、一箇所に一種類の作物の大量作付けなどに起因する病害虫への対応、気候の変化に伴う出来高の変動や雑草対策などのビニールマルチや冷害対策用のパオパオなどの副資材の用意など経済的な負担も含め明るく楽しい未来は見えていませんでした。時が経てばたつほど、自分たちは何がしたかったのか、などの疑問と不安が頭から離れませんでした。

そんな中、この疑問と不安をなんとかしたいと、2002 年 4 月に鹿児島県有機農業協会の生産工程管理者としての講座を受講したり、ＥＭ菌の勉強会に参加したり、ＭＯＡ自然農法の研修会や沖縄のＭＯＡ自然農法研究所の視察なども行いました。それでも自然環境に負荷を課す大量の肥料投入や農業副資材を使用したり、中型機械を導入した農業に納得が行かず心が痛んでいました。

その様な日々の中、私より 15 年早くから営農を始めていた近くの親友が、1 丁 5 反の米つくりや 2 反の野菜つくりをしていました。その頃の彼の農機具は中規模でしたが、広範囲にわたる町内の高齢者農家の請負的な作業の収入で、農機具の購入や維持管理費の不足を補っていました。そのうち、田圃だけでも 15 丁になり、農機具を大型化せざるを得ず機械の維持費がふくらみ、自分が直接拘わっていない圃場の農薬散布や、農閑期には土木現場の重機のオペレータなどをして経費を補っていました。

そんなある日、彼と自然農法の話が弾み、彼は愛媛県の福岡正信さんに会いに行き、そのときの感想を聞いたり、書物の話など花が咲いたのですが、彼は機械代など経済的な面で現状を変えることが出来ませんでした。私はまだ自然農法を理解する域に達していなかったので現状のまま日々が過ぎました。

それから 8 年後、彼は癌に侵され 64 歳で他界しました。私は彼の死からも大切なことを学び、今の農業には未来は無いことを、妻と一緒に深く実感しました。

私達は、自分達にあう農業の仕方が他にあるのではないかと、いつも考えていました。

私達が「自然農」という言葉に出会ったのは、2006 年頃自然食の関係の本の中ででした。自然農のことをもっと知りたいと思っていた頃、自然農の手引書「いのちの営み、田畑の営み」鏡山悦子著、が 2007 年 1 月 25 日付の南日本新聞に紹介されているのを目にしました。その年の 6 月 10 日には福岡自然農塾見学学習会に参加し、田畑を見せてもらい、お話を伺い自然農でやって行こうと決めました。

家に帰り何のためらいも無くこれまで使用していた農機具を処分しました。なるべくお金の掛からない生活の工夫と、塩を舐めてでも生きていこうと決意しました。そして自然農に切り替えてからは徐々に営農をやめました。

1 年経った頃から自然農に興味のある方が時々田畑の見学に訪ねて来られるようになり、教えて欲しいとの声も多くなってきました。まだ自然農については未熟でしたが、自らも一緒に学んでいけばいいと思い、同時に自然農を鹿児島にも広めたいと、「自然農学びの会鹿児島」を開くことになり今に至っています。

幸いなことに、幼い頃、明治・大正生まれの祖母や父の農作業の手伝いをしていたので、農業の技術についてはある程度身につけていました。自然農の理については川口さんの書物やＤＶＤなどで学ばせてもらいました。「自然農学びの会鹿児島」では、人力機械や昔から南九州地方で使われていた農機具の掘り起こしや、その使い方、手入れの仕方などをまじえて、また暮らしの中、食材の保存やその食し方などの学習も目標にし、「自然農栽培の手引き」なども教本とし、今年で 11 回目を迎えました。

大根やバッタが教えてくれるいのちの世界

福﨑祥子
自然農歴 11 年
営農歴　 7 年
鹿児島市 在住

有機農業を経て、自然農に切り替えてから、私が見た田畑の光景の中で、忘れられない光景がいくつかあります。そのうちの二つをここに紹介します。

自然農に切り替えて、種とり（自家採種）を積極的にするようになった頃のことです。

種をとる大根を収穫せずに残しておくと、塔立ちして、そのうち大根の上に傘をさしたように広がります。つぼみがつき花が咲き、みどり色のさやができ、そのうちそのさやは薄かっ色になり、その中に茶色の種ができます。どの段階ものびやかな健康的な美しさがあり、全て食用にもなります。

そろそろ種を刈りとろうとしたある日のこと、ふと足元の大根に目がいきました。しゃがんでよく見ると、大根の皮は筋だけが残り、まっ白いレースのようで太陽の光でキラキラ輝いていて、その美しさは格別のものでした。

大根は雪でつくるカマクラのようにほぼ空洞になっていて、その下の地面はしっとりとしてふかふかで、ダンゴ虫や名前の知らない小さな虫達が、私の気配に気づいてあわてて逃げまどっていました。白いレースになった大根の皮から光が透けて、そこはまるで絵本の中の世界のようでうれしくなりました。

私の知らない間に、種をつけた大根は皮だけになりいのちは消えていたのです。なんだか大根が人間の親とだぶり、種が人間の子供のようにみえて、大根がいとおしく、しみじみとした気持ちにもなりました。

自然農をはじめるまでは、野菜を収穫したら大型機械で全て耕して消石灰で消毒し、リセットしていました。うねをこわさないで、野菜の一生を見ることができるのは、自然農ならではです。いのちを終えつつある野菜の横に違う野菜の種をおろすこともできます。いのちを終えたなきがらは、土にもどり、小さな虫達や草や次の世代のいのちの世界につながっていく。納得のいくやり方です。

もうひとつ。秋の田んぼでのことです。

稲刈りをしている途中で、小さなバッタが稲の葉にとまっている姿をみかけました。じっとしているのでさわってみましたが、動きません。光沢のある緑色の体に黒いまんまるの眼をして、生きているみたいです。さわるとピョンととんでいきそう。でも、死んでいるのです。

この光景に出くわすと誰でもはっとさせられます。生きていること、死んでいることを考えさせられます。夏の間に稲の間をあんなに元気よくとんでいたバッタ達を思い出し、目の前の死んだバッタを見つめます。いのちは消えたんだなぁ。でも来年はまた元気よく子供のバッタ達がとびはねるんだろうなぁ。

黄金色の稲が実る田んぼの中、稲の葉に、生きているかのようにつかまって死んでいるまんまるい目のバッタの姿は、静かで美しく、いとおしく、おごそかに映りました。

大きな機械で農作業をしているとこんな小さなバッタには気づきません。ましてや農薬や除草剤を使っての農業では、草や虫を排除する気もちが働くのでいのちの世界を学ぶことはできにくいです。植物と同じ目の高さに腰をおとし、小さな道具を使い手作業のスピードで農作業をすることで、気づき、手を止め、感じることができるのです。まさに自然農のやり方です。

二つとも小さなできごとですが、真理に近づけるできごとでもあります。真理に気づけば、本当に大切なことがわかってきて、生き方や日々の暮らし方も自ずと変わってきます。納得のいく生き方の方へ歩いていけると思っています。